

体育における授業評価の方法についての一考察

A Study on the method of Assessment in Physical Education Classes

1K03B804-3 望月 敦夫

指導教員 主査 友添 秀則 先生 副査 吉永 武史 先生

【本研究の動機】

教育実習の経験を通して、教師としてより良い授業を実践することは重要な課題であるということを認識した。そして、良い授業を展開していく上で、自らの授業を省察するための方策の一つである授業評価に注目した。高田は、授業評価について、教師の教授活動場面などに焦点を当て、授業の効率化や問題点の改善を図ることを目的として行われるものであると述べ、授業評価の重要性を指摘している。一般に、教育活動の過程として「計画―実践―評価」の一連のサイクルが挙げられる。このサイクルの観点から、私は、実践について省察を促し、次の計画立案へとフィードバックを与える評価が非常に重要であると考え。なぜなら、適切な評価を行うことで、授業実践の改善が可能となるからである。教育実習を経験して、自らの授業がどのように展開されていたのか客観的に把握することができなかったという課題が残された。この課題を解決するためには授業評価を適切に実施することが重要であると感じた。そこで私は、体育の授業評価について調査し、どのようなものがあるのか詳しく知りたいという思いから本研究テーマを設定するに至った。

【本研究の目的と方法】

本研究では、体育科において授業評価の方法がどのように検討されてきたのかについて明らかにすることを目的とする。現在、扱われている体育科の授業評価法について、活用目的ならびに実施方法などの観点から分析、考察を進めていく。加えて、それらを実際の授業実践でどのように適用すれば効果的であるのか考察したいと思う。また、本研究では、主に国内を対象とした体育科の評価に関する文献を収集し、分析、考察を進めていく。

【各章の概要】

<第1章>

第1章では、授業評価の意義と重要性について歴史的変遷から考察した。現在の体育科で用いられている授業評価、特に診断的授業評価、形成的授業評価、総括的授業評価は体育科において、提案されたものではない。元来、教育学における学習評価の領域から派生したものである。その基盤となっているのはブルームの理論である。ブルームの理論構造について評価論を中心に全体的に捉える。また、我が国ではどのように授業評価法として修正されてきたの

かを考察した。ブルームの理論では評価の教育的な機能が強調された。我が国の教育現場にも、地域、教科、発達段階など、それぞれの特性に応じて工夫され取り入れられた。

<第2章>

第2章では、体育科における授業評価の変遷を、診断的・総括的授業評価が考案されるまで追った。その先駆的な研究は小林によって行われ、「体育授業診断法（態度評価尺度）」が開発された。また、梅野・辻野や奥村らは小林式診断法にもとづきながら、小学校低・中学年の児童を対象に再検討した。高橋らは小林式の評価法の意義を認めつつも、その評価項目が古い体育観（運動による教育）に依拠していることを問題にし、現在広く支持されている体育観（運動の教育）にたって、4つの観点から評価することを明らかにした。

<第3章>

第3章では、日々の授業の省察を得るための形成的授業評価が考案されるまでの変遷を追った。形成的授業評価法として最も広く活用されてきたのは、「高田4原則」と呼ばれる4つの評価項目である。小林は「高田4原則」に着目し、これら进行评估観点とした形成的授業評価法を確立した。この方法はあくまでも教師の経験的な考えにもとづくものであったため、高橋らは子どもの立場から実証的に検討された方法の開発を試みた。この研究の結果、子どもが1時間の体育授業をどのような観点から捉え、評価するか、子どもの形成的授業評価の構造が明らかになり、実用的な形成的授業評価法が作成された。

<第4章>

第4章では、授業実践報告を総合的に見て、授業評価がどのように取り扱われたかを考察した。これらの実践報告の多くは、授業の成否のみに言及している実践報告が多い。しかし、授業評価の省察がなされ、授業改善のための有効な判断材料として用いられている事例もあり、授業評価の本来の姿がうかがえた。

<結章>

結章では、今後の課題として、質的データによる授業評価法を確立し、さらに、これまで実施されてきた量的データによる授業評価法とうまく融合または併用し、授業実践で使用可能な方法論の確立やシステム作りをすることを提案した。